# 67年ぶりの再会

古畑 和孝

長く生きていれば、それだけいろいろな経験も積み重ねる。新奇な経験、不思議とも思える経験をすることもある。

その一つが、去る10月21日の晩のことだった。

われわれ昭和19年入学五中1年C組のクラス会は、毎年この時期に開催されてきた。だが、例年とは著しく異なった特徴の会となった。

それはこういう次第だ。入学時はE組だった片岡淳君がある時今年の叙勲者が掲載されている新聞を見ていた。すると、思い当たる名前に出会った。「井上章」氏だ。片岡君は豊島師範(東京第二師範)付属小学校の白組だった。井上章君は6年間を通じての同級生だった。この小学校は6年間持ち上がりだった。序でながら、女子は緑組、私は赤組だった。

この井上章君は、五中では1年C組に入学した。だが在籍は1年間だけで、それ以来の動静はつかめぬまま、いわば消息不明のままだった。

新聞によれば、叙勲された「井上章」氏は79歳、秋田大学名誉教授とある。

氏名・年齢からすれば、豊島付属小や五中の「井上章」君の可能性が高そうだ。そこで、片岡君の執念の探索が始まった。ところが、個人情報開示に対する制約のため、壁にぶつかってしまう。そこで思いついたのが、秋田県出身の

元衆議院議員・(元内閣官房長官)の村岡兼造君だ。詳しい経緯はともかく、村岡君の全面的協力もあり、プライバシーの壁を乗り越え、豊島・五中の「井上章」君と判明するに至った。すると、何とかして再会の機会を設け、歓迎会を催したいということになる。そこで、豊島の白組の会と五中1Cの会を連動させようということになった。私自身は偶々その双方に関わりがある。だが、いかんせん進行癌の患者になってしまった身だ。何も出来ない。1Cの会の不動の常任幹事小林三郎君の大活躍により、例年のごとく、あの赤坂倶楽部に再会の場は設定された。

それに先立ち、豊島の白組の会は、片岡淳君・小林秀之君の他、五中関係では、慶松勝太郎君、竹割克爾君、田中稔君など、8人での歓迎会だった由。そのことは片岡君による報告に詳しい。

井上章君は、今年 6 月栄えある瑞宝中綬章を受章された秋田大学名誉教授の国語学者だった。前半はキリシタン資料による中世語などの研究をされ、それを機縁としてブラジル・サンパウロ大学日本語科の客員教授を勤められたこともある。後半は、日本における自然地名の研究を、フィールドワークに重きを置いて、神話や伝説などとの結びつきに関する新知見などを幾多齎されたようだ。ご自身でも仰せのように、まさに五中の開拓・創作の精神を体現されたも

のといえよう。
　井上君は、秋田の銘酒の一升瓶を 2 本も抱え、大きな箱入りの稲庭うどんを何箱も携えてこられたのには恐れ入った。その上、ご縁だからとて、五円 2 枚を重ね合わせ紐で縛ったものを、全員に配って下さった。ますます恐縮した。
　こうして、まことに不思議な縁での 67 年ぶりの再会が実現した。井上君お持たせの、秋田の銘酒を味わい、稲庭うどんを入れたしゃぶしゃぶをつつきながら、久闊を叙したのであった。すっかり打ち解けてしまった。

　なお、最後に自己紹介を兼ねて、集った全員 15 人が一人ずつショート・スピーチもした。1 年 C 組ではなかったものの、卒業時に C 組で、この会実現の立役者の一人だった村岡兼造君は、乞われて特にゲストとして出席してくれた。それぞれ個性豊かだったが、中でも、永年原子力の研究も推進してこられた田村修男君が、憂国の至情をもって東日本大震災の際の東電の諸問題を深く指摘されたのには、襟を正して傾聴した。

　こうして、67 年ぶりの再会が叶ったのであった。井上章君が秋田に行かれたのは、秋田は元々故郷であり、直接的には 1945 年 3 月 10 日のあの東京大空襲で焼け出されたからということなども判明した。
　それにしても、消息不明がこんなに劇的な仕方で、そのご本人の顕彰が契機となって解明されるなどとは、まるで小説のようですらあった。感謝である。

　しかも後日談がある。井上章君はこの上京の際に、かねて関心の深いある場所を訪問され、自然地名の研究で、井上君の仮説を検証することもお出来になったという。素晴らしいことではないか。井上君も、殊の外、喜んで下さったようである。次回の会合の楽しみがまた一つ増えることともなった。

　さらに、小林三郎君は「一年 C 組谷鼎先生のクラス」「わが 20 世紀の一齣」「青春の雲、動く―激動の昭和を生きた小石川高校 1950 年卒の軌跡―」「谷鼎全歌集」などを井上章君に贈られた。何時もながらのご配慮に感謝したい。

　最後に、一つお詫びしたい。私は SNS ミクシィで公開日記を記しており、その会の当日既に、この会の模様を日記に記したのであった。その後、しかしながら、命あるうちにということで、「聖地イスラエル旅行」をし、帰国後は検査入院などをしていたために、ご報告がすっかり遅くなってしまった。ご寛恕を乞う次第である。